

タカは目をキラキラとさせて、

「まあ、ガイジンさん、ヘローヘロー。万博の

お帰りですか？ お泊りは国際親善でっせ！ 安

うしときまつせ。勉強させてもらいます。さあ、

はよはよ、あがってください」

「ワタシ、イマ、ベンケイさんニアイニキマシタ」

「へえ？」

「ハイ、ベンケイさんデス」

そこへ裏の板場の方から、お伊セさんが駆け込

んで来た。

「御家はん、御家はん、すんません。泊まるかど

うかはこれからですきに！ このお方、聡子ねえ

ちゃんに話、よう聞いてもらわんと、いかんみた

いですわ」

「ワタシ、ニホンゴワカリマス」

「お伊セ、わかるゆうてるで。私も日本語はわかるで」

タカはニヤニヤしていた。

そして、このタカの言葉を聞いて、この外国人も

はじめて、ハツと声を出して笑ったのである。

硬い表情だった外国人の顔が、笑顔とともに

和んだ顔になった。大きな右手をすつとタカの方

に出すと、

「ワタシ、ゴダン、モニツク・ゴダントイイマス」

と言いながら、握手を求めた。

「へえ、あんた、なんの五段？ 五段つて、碁か

な、ナギナタな？」

「イイエ、ナマエデス。ワタシノナマエハゴダン
デス」

話を聞けば、この五段、いやゴダンさんが探し

ているのは、琴平検番の弁慶姉さんだったのだ。

お伊セが『ベンケイ』と言われても結びつかない

のも無理はない。なんでこのガイジンさんが弁慶

姉さんに会いに来たのやろ？ 脇でタカとゴダン

さんのやり取りを見ている聡子もタカと同じ思い
であった。

弁慶姉さんは、いずれにしても明日の夜、すし辰

のお座敷に予約があつて呼ばれているから、間違

いなくここに来ることは確かである。タカはそん

な風に説明した。ゴダンさんは、その言葉を注意深

く聞いていたが、最後にはわからないという顔で

眉間にしわをよせながら、こうタカに聞き返した。

「ナゼイマイナイデスカ？」

「おるわけないわで」

「ん？」

「ゴダンさん、あのね、ここは弁慶の住まいやな

いんや」

「ホントウデスカ？」

「ホンマデス」タカまで言い方が変になっている。
「ここは安宅関やないんやで。それに義経の素性
隠すならわかるけど、弁慶隠してどないするん
や！　うちは旅館やで」
「デモ、ベンケイさんハココニイルトオシエテモ
ライマシタ」
「誰や、そんなことゆうたんは」
「ウドンヤさんデス」

タカはピンと来た。真砂屋の五郎だ。真砂屋の
五郎がこのガイジンさんにそう教えたに違いない。

(五)

正月のテレビとは、弁慶が大阪のテレビ局に
まで行って、三味線の腕を披露した番組のことで
あった。弁慶がテレビの邦楽番組に出演するのは、
それがはじめてのことではないが、正月の番組で
は全国の三味線や鼓の名手が新年の祝いの演奏
をするというので、弁慶もその「晴れ舞台」に張り
切って出演したものであった。

ゴダンさんはその弁慶の三味線の演奏を見て
感動し、この夏の休暇を利用して、わざわざ琴平へ
なんのつてもないのに弁慶さんに会いに来たとい

「ふーん。弁慶の三味線か。大したモンやな。カ
ナダのお方」

倉之助は旅館組合の会合からそうそうに抜け出
して来たと言いながら、まだ五時にもならないの
に帳場の脇の応接間で一杯やりながら、タカの話
を聞いている。

「なんでも、ほれ、今年の正月のテレビ見たらし
わ。大阪で」

「はあはああれか。あのテレビの弁慶見たんか」

う。ゴダンさんは大阪の大学に去年から日本の
古典芸能の研究に来ているのだという。弁慶がす
し辰に在るといいうのは、やはり真砂屋で偶然、道を
尋ねて教えてもらったのだそうだ。

「あの五郎はんはほんましようないな」

「まあ、いたずらやろ」

倉之助はたしなめるつもりでタカにこう答えた
が、タカの語気はいつもほど強くはない。それも
そのはずである。ゴダンさんは結局、すし辰に泊
まることになったのだ。

タカはにんまりとして、さらに倉之助にこう言

で五千円としたら、四日泊まれるけど、ほんでも、
弁慶さん絶対会わんゆうたら、どうするん。はじ
めからほんまのことゆわんで困るんと違う？」
と畳み掛けるように言った。

タカは食後のキセルタバコをもうくゆらせてい
た。

「ぶ〜ん」

「ばあちゃん、どうするん？」

「まあ、ここは二万円ぶんは泊まってもらうて、

その間に、ばあちゃんが弁慶を説得するわ。ガイ
ジンゆうても、アメリカやないし。弁慶はガイジ

タカのこと。お見通しのようである。

「福代、あんた、どうせ人手足らんで、『出鱈目』

はんや弁慶さんに用があるんやろ。行くついでに、
カナダの偉いお方があんたの三味線聞きたい、話
も聞きたいゆうて、しっかりつないでや」

「偉いんですか？ あのお方」

「そりやそうや。ゴダンやで。偉いに決まってい
る。名前からしてそうやけど、あんた、カナダか
ら弁慶の三味線聞きにわざわざ来るなんて、見上
げたモンや」

ンはみんなアメリカさんやと思ひ込んどるんや。
カナダはアメリカと違うんやし。なんとかする」

(六)

翌朝、猫に鈴ならぬ「弁慶に鈴」をつけにゆく
役目は福代に決まっていた。

福代はどつちみちこの朝、検番の近くに住んで
いる弁慶の家に、仲居さんのできる者知らない
か聞きに行くつもりだったのである。それはタカ
には伏せていたことなのだが、さすがは勘の鋭い

「おかあはん、来たんは大阪からや」

倉之助がタカの後ろから笑いながら、水をさし
た。

「ああほうか、大阪からか。福代、ほんたら、大阪
から人があんたの三味線聞きたいゆうて来てるか
ら、きょうの座敷の前にちーと早よ来て、会うて
やうてゆうて。座敷ではないゆうて念はおしてな」
「へえ」

とは言ったものの、なんで私やろ、おかあはん
が言えば、ずっとすんなりゆくかもしれんのに：
と福代はひとりごちながら、白い日傘をせわしな

く手にとると、朝九時というのにもう暑い通りを
早足で出かけていったのである。

倉之助は、タカが手っ取り早くていいと毎日飲
んでいるネスカフェの瓶を取り、いつものカップ
でコーヒーを作っていた。

「あんた、この頃、毎朝、私のコーヒー盗ってる
な。まだどうしたことや」

「うん、喫茶は昼からにしてるんや」

「朝行かんのなら、昼か。なんで昼や」

「いや、朝は選挙の話ばかりやから」

ある。倉之助は朝はこの喫茶に行き、ふつうなら昼
は大概昼寝。夜はたいいてい、バー『出鱈目』に行く。

『出鱈目』とはまた面白い名前であるが、変わり者
の店のマスター堅作が「値段も出鱈目、ママの顔も
出鱈目と思ってくれてちようどええ」という看板
を出している。まあ由来のつもりだろう。

看板に偽りありというところかもしれないが、
ママは姉さん女房で五十をとうに過ぎてているが、
有馬稲子似の美人だし、よく気がついて、人にも好
かれるいい人である。値段も出鱈目どころか安く

朝のうち、今秋の町議会の選挙に出るらしい
鴨田がいるからいやなのだという。

「はあ、鴨田はん出るつもりか、そりや朝はうる
さいな」

タカは合点がいった。

「まあ鴨田はん、昼も喫茶行ってほしいくらいや。

あんた、なるべく帳場でおればいいんや。ほんま

やで、ちつとは店番しい」

「喫茶」というのは、すし辰からそう遠くない一の
橋の近くにある『鍛冶屋』という喫茶店のことで

て、入りやすい。こういう観光町のバーにしては、
居酒屋よりも安い値段で、おいしい酒を出してい
る。

マスターの堅作はまだ四十歳になったばかり
で、倉之助とは小学校の同級生である。

「おかあはん、僕な、堅作と相談事があるんや」
といっっては、ほぼ毎日、夜になれば『出鱈目』へ出
かける。店のいちばん忙しい時にである。

「あんたいつまで学級会の続きやってんのや」
とタカは不満げであるが、しっかりとはいさめた

りしない。うるさい大女将おおかみのタカも、この一人息子ひとりむすこ

の倉之助くらのみすけだけには甘いのだ。

(以上12月10日放送分)